武道と宗教の関係性に関する一考察　―合気道の身心観形成と大本―

0960681D　西 尾 定 也

キーワード：武道，宗教，身心観

序論

日本武道の精神性は伝統的に宗教と絡み合ってより高次に発展をしてきたと言われている。武道と宗教の関連性についての研究はこれまでにも複数行われてきたが、身心観の観点から武道と宗教の関係性を検討したものは見つからなかった。また、武道の視点に立って日本的な身心観を明らかにしようとする研究では、武道と宗教の関係性の存在が述べられつつも、結局その武道の身心観のみに終始し、宗教との比較には焦点が当てられていないように思われる。

そこで、本研究では宗教（大本）の影響を多分に受けて形成されたと思われる合気道の身心観という観点を通じて、武道と宗教の関係性の一端を検討することを目的とする。また、そのための方法として、各章のタイトルを課題に設定し、各章に挙げた対象毎に身体、心、心身関係それぞれについての分析をしている。本研究が日本の伝統的な武道と宗教の関係性を明らかにする一助となればよい。またそれこそが本研究の意義である。

本論

第１章　大本の思想と身心観

大本は教派神道系の教団である。開祖である出口直や、直の娘婿で聖師という立場にあった出口王仁三郎は、霊能者であったと言われている。主な教義には、型の論理や立て替え・立て直し思想があるが、ここでは省略する。

大本は、とりわけ古事記や日本書紀の神話に基盤を置いている。つまり、古神道に見られる自然崇拝や祖先崇拝の精神が根底に流れていると考えられる。少し具体的に述べると、大本では、宇宙を創造したのが神ならば、万物を生む宇宙そのものもまた神であると考えられている。ちなみに、大本では神を大元霊と表現する。まずはこれらのことを念頭に置いておきたい。

出口王仁三郎の著書によると、大本の思想における身体とは、大元霊が生み出した霊の容れ物であり、大宇宙に対しての小宇宙とされている。また、大本の思想における心とは、大元霊の分霊でありながら、現在は穢れてしまったものとされている。心身関係の観点では、共に大元霊から生まれた心身は、現在は分かれた二元的な状態にあると分かる。大本の修行（水行や祝詞の奏上など）はこれらを統一していく実践的な方法の１つであり、心身が統一（＝神人合一）されれば、真理を理解できるとされている。

第２章　合気道の理念と身心観

まずは簡単に合気道の誕生プロセスを追っておきたい。合気道の創始者は植芝盛平である。彼は青年期に数々の武術修行を行っているが、物足りないものを感じ、それを埋めるために大本に入信する。大本での修行や自身の武術修行を重ねるうちに、植芝盛平は神秘体験を経験する。この神秘体験とはいわゆる神懸かりであるが、植芝盛平はこのきっかけによって武の存在理由を知ったと後に述懐している。この後、植芝盛平は神秘体験を何度も経験しながら、更なる自身の修行に励み、合気道を完成させたとしている。本研究では、1948年に正式に合気道を名乗った時点を、合気道の完成としている。

ここからは合気道の理念における身心観について述べていくが、ここでの史料は植芝盛平の語録を使用した。まずは、身体について検討する。合気道の理念における身体とは、罪けがれを負うものではあるが、魂の容れ物であり魂を

磨く場所（祭場）とも言われている。また宇宙観の観点からでは、物質界の森羅万象は神である一元より発しており、人とも起源を同じくしているから、合気道では修業の参考にされるべきものとされている。

また、合気道の理念における心についても、現在は穢れているものとされている。それを清めるのが合気道であって、その過程で肉体も立派になっていくから、まずは魂の浄化が最優先課題と考えられている。

そして、理念における心身関係については、大本の思想にあったのと同じように、もとは一つのものから生じたものでありながら、現在は分かれて穢れてしまったものと分かる。合気道はそれぞれが汚れた二元的状態を解消する禊であり、心と身体を調和させる実践的手段と言える。また、心身の統一の結果、体内にある宇宙の働きを感得することができるとされていた。大本の修行と異なるのは、その方法が祝詞などの宗教的なものではなく、1つの武道として身体を用いていることである。つまり、合気道の理念が技術へと昇華されているはずである。

第3章　合気道の技術における身心観

それでは具体的にどのようにして理念から技術への昇華がされているのか。まずは、合気道の技術の特徴をおさえておきたい。ここでの史料は植芝盛平監修の技法書2冊を用いた。この2冊の技法書によれば、合気道の技術は、各項目に分けられた「基本動作」を修練し、次に「基本動作」の各項目が一体となった「基本準備動作」の修練を、さらにより実践的な「基本技法」の修練へと、技術の進歩につれて、体系的に段階が組まれている。

そしてこれらの中から、合気道の技術の特徴をあげるならば、「動きの多彩さ」と「気」があげられるだろう。動きの多彩さとは、足や手の捌きによって生まれる円や球といった表現に表れており、合気道ではこれを「円転の理」と呼んでいるが、理念が技術における身体（操作）へ昇華されたものと考えられる。この「円転の理」は、理念における「和合」と大きく関わっていると思われるが、その理由は、丸みを帯びた曲線的な動きは、直線的な動きによる相手との衝突を避け、自己の内に吸収していくことに繋がるからである。

また、技法書における心とは、身体と切り離して考えられているが、修練を積むにしたがって、一体になっていくものと考えられている。また、相手と和合するという合気道の理念は、「間合」という技法の項目に含まれる心（意識）に昇華されていたと理解することができた。

そして最後に、技術における心身関係について述べたい。ここでのキーワードは「気」であるが、植芝盛平は「気は心と体を結ぶもの」と考えていた。理念においては、心と身体、自己と宇宙を結び付けるものが、「気」と表現されていたが、技法書の中では、体内に流れている気を外界に気力として出していくことを、「呼吸力」と説明しており、合気道を行じる上では、常に呼吸力を充実させることが必要とされていた。

以上より、合気道の技術は理念を昇華して形成されたものと見ることができる。

結論

本論から分かるように、大本の思想が合気道の身心観形成に与えた影響は大きい。ここでは、具体的に3点を挙げておきたい。その3点とは、「心身は1つのものに由来しており、一体となるべきという考え方」、「心身の穢れと禊」、「宇宙論的身体観」である。それぞれが、本論で述べてきた通りである。

それでは、最後に武道と宗教の関係性について考察したいが、植芝盛平が大本の思想を自らの武道に取り入れた理由は2つ考えられる。まず1つは、純粋に心の強さを求めてである。もう1つは、「武」の存在理由を求めてである。本研究では、この2点に「武道と宗教の関係性」の理由があると見ることができた。

（指導教員　秋元　忍　准教授）